

子規全集

第一卷 俳句一



N. D. C. 910 624p 20 cm

子規全集 第一卷

俳句 一

定價 參千六百圓

昭和五十年十二月十八日 第一刷發行

著者 正岡子規

編集者 正岡忠三郎

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽二一二—二二一

電話 東京(〇三)九四五—一一一(大代表)

郵便番號 一二二 振替 東京三九三〇

印刷所 株式會社 精興社

製本所 大製株式會社

本文用紙 三菱製紙株式會社

©正岡忠三郎 一九七五年

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

1 子規全集正誤・補訂表

[illegible]

目次

寒山落木	明治十八年ヨリ 同二十五年マデ	一
寒山落木	明治二十六年	二
抹消句	自明治十八年 至同二十六年	四一五
參考資料		五二七
解題	和田茂樹	五七九
解説	杉浦明平	六二一

編注

子規は明治十八年から自作の俳句を半紙二折綴りに編年體で分類淨書しはじめ、これを『寒山落木』と名づけた。本全集では自筆本『寒山落木』（國立國會圖書館藏）を底本とし、そのうち本巻には明治十八年と二十六年の分を「抹消句」をも含めて翻刻收録した。なお、この期間の未載録句は本全集『俳句三』巻末に一括して掲げた。

脚注について

一 脚注は、初出の雑誌・新聞、および選句集名をその刊行年月日順に記載した。

一 俳句の下の算用數字は、抹消句の位置を示し、且つ巻末の抹消句番號と對應する。なお、數字が季題の真下の位置にある場合は、その句の前に同季題の句が抹消されていることを示す。

一 脚注の略記號その他については次の通りである。

例 日本 26・3・4 「雜」二十・10 新

早稻田文學 29・11・1 『四季雜詠』——田舎哉

同 『同』

初出誌又は新聞紙名 發行（明治）年月日「句題」

又は「前書」句數（例・二十句中の第10句を示す）

『』は、隨筆・紀行等の文題。掲載誌紙の異同は
上五 中七 下五 の内、異同個所のみ表記した。但し、哉↓かな 時鳥↓子規 等の同音異字の場合は注記しなかった。

同↓初出誌紙、掲載年月日が前句と同一の場合。

「同」「同」↓「」「」内の前書・文題等が前句と同一の場合。

葉↓二葉集・明治二十七年五月刊

増補 瀬田再版瀬田書屋俳話附録（選句集）・明治二十八年九月刊

新↓新俳句・明治三十一年三月刊

雜誌はとゞぎすは便宜上、松山版（明治卅年一月）

明治卅一年八月迄）は、はとゞぎす、東京版（明治

卅一年十月以後）は、ホトトギス、と表記した。

一 雜誌新聞等で、のちに「正誤」のあった句・前書

については訂正字句に従った。

一 「（）」は編者が記載したものである。

寒山落木

明治十八年ヨリ
同二十五年マデ

一

第一期

明治十八年 夏郷里松山ニ歸ル○嚴嶋ニ遊ビ祭禮ヲ觀ル○九月上京

全 十九年 夏久松定靖公ニ扈從シテ日光伊香保ニ行ク○九月歸京

全 廿年 春腸胃ヲ病ム上野ヲ散歩ス○夏歸省○九月上京

全 廿一年 夏牛嶋月香樓ニ居ル○九月歸京常盤會寄宿舎ニ入ル

全 廿二年 四月水戸ニ遊ブ往復一週間○五月咯血 七月歸省九月上京不忍池

畔ニ居ル後再ビ常盤會寄宿舎ニ入ル 十二月歸郷

全 廿三年 一月上京七月歸郷 九月三井寺觀音堂前考槃亭ニ居ルコト七日直

チニ上京

全 廿四年 春房總行脚十日○六月木會ヲ經テ歸郷 九月上京途中岡山寒懸ニ

遊ブ○秋大宮ニ居ルコト十日 冬駒籠ニ居ヲ遷ス○川越地方ニ遊

ブコト三日

明治廿五年 一月燈火十二ヶ月ヲ作ル其後何ト十二ヶ月ト稱スル者ヲ作ルコト

絶エズ 春根岸ニ遷ル 夏歸省ス 九月上京 十一月家族迎ヘノ

タメ神戸ニ行ク京都ヲ見物シテ上京○此年夏ヨリ日本紙上ニ投稿

十二月ヨリ入社

明治十八年

梅のさく門は茶屋なりよきやすみ
 夕立やはちすを笠にかぶり行く
 ねころんて書よむ人や春の草
 小娘の團扇つかふや青すだれ
 木をつみて夜の明やすき小窓かな
 朝霧の中に九段のともし哉
 初雪やかくれおほせぬ馬の糞

5 4 3 2 1

明治十九年

一重づゝ一重つゝ散れ八重櫻

7 6

明治二十年

ちる花にもつるゝ鳥の翼かな

8

春雨や柳の絲もまじるらん

10

散る花のうしろに動く風見哉

11

鶯や木魚にまじる寛永寺

胡蝶飛ぶ簾のうちの人もなし

谷中にある清水うしの墓にもうでゝ

12

一枝やたましひかへす梅の花

同 學生よりあひて人の目的を投票にて
定めける時

それ／＼に名のつく菊の芽生哉

13

同 観音堂

むら鳥のさわぐ處や初櫻

14

散る梅は祇王櫻はほとけ哉
上野

花の雲かゝりにけりな人の山
清水氏一周忌

落花樹にかへれど人の行へ哉
ぬれ足で雀のあるく廊下かな
名月の出るやゆらめく花薄
けさりんと体のしまりや秋の立つ
茶の花や利休の像を床の上
甘千の枝村かけてつゞきけり
甘千にしたし浮世の人心
初汐やつなぐ處に迷ふ舟
夕立や一かたまりの雲の下
宵闇や薄に月のいづる音
親鳥のぬくめ心地や玉子酒

〔祇王 原ママ ↓ 祇王 (下は正しい字句を示す。以下同)〕

眞砂の志良邊 20・11・12 「茶の花」
利休の像の響應しに
眞砂の志良邊 20・10・12 「甘千」 枝村
へまで甘ほしの――

眞砂の志良邊 20・9・12 「初汐」

白梅にうすもの着せん煤拂
何もかもすみて巨燧に年暮るゝ

真砂の志良邊
覆しておかん
20・12・12
「すゝはき」

明治二十一年

花に行く足に二日の灸かな
 山焼くや胡蝶の羽のくすぶるか
 見ればたゞ水の色なる小鮎哉
 梅雨晴やところ／＼に蟻の道
 すつと出て苔見ゆるや杜若
 萎みたる花に花さく杜若
 底見えて小魚も住まぬ清水哉
 木の枝に頭陀かけてそこに晝寐哉
 蚊柱や蚊遣の烟のよけ具合
 夕立の來て蚊柱を崩しけり
 振袖をしぼりて洗ふ硯哉
 女にも生れて見たき踊哉

23

22

眞砂の志良邊 21・7・12 「晝寐」 木の
 枝へ頭陀掛なから

萩ちるや檐に掛けたる青燈籠
 西日さす地藏の笠に蜻蛉哉
 鹿聞て出あるく人も歸りけり
 一ひらの花にあつまる目高哉
 海原や何の苦もなく上る月
 くらがりの天地にひゞく花火哉
 青くと障子にうつるはせを哉
 秋の蚊や疊にそふて低く飛ぶ
 哀れにも來て秋の蚊の殺さるゝ
 狼の聲も聞こゆる夜寒かな
 不二こえたくたびれ白や隅田の雁
 夕榮や雁一つらの西の空
 片端は山にかゝるや天の川

24

25

26

27

28

眞砂の志良邊 21・8・12 「はせを」障
 子越し青みの移る――

眞砂の志良邊 21・9・12 「雁」――つ
 かれか隅田へ下雁〔貞顔〕

いとけなき頃よりはぐゝまれし姫のみま
かり給ひしと聞くに力を失ひて

添竹も折れて地に伏す瓜の花

聲立てぬ別れやあはれ暖鳥

一夜妻ならであはれや暖鳥

雪よりも時雨にもろし冬牡丹

白露のおきあまりてはこぼれけり

根津のあとにて

明家やところ／＼に猫の戀

30

29

眞砂の志良邊
21・11・12「冬牡丹」